

## 学生時代と図書館 43

彷彿とさせる古きよき時代

中川 良雄

Fay ce que voudra (Fais ce que tu voudras 汝の思うがままになせ)。フランス・ルネサンス期のユマニスト作家フランソワ・ラブレーの *Gargantua et Pantagruel* の一節である。わたしがこの一節に出遭ったのは、大学院の学生のときだった。当時のわたしはフランス語学を志していて、フランス16世紀のフランス語に狂っていた。

ラブレーの巨人王伝説 *Gargantua et Pantagruel* は、大学院に入学してすぐのころ小遣いをはたいて購入した。実はこの作品は、すでに渡辺一夫の翻訳があり、ラブレーの研究家であった、渡辺の著作集や単行本を、古本屋や古書市などで買い漁るのが楽しみの一つでもあった。

大学院生には図書館書庫への出入りが許されていたので、書庫に入り浸っては、首を横に傾けながらフランス書の背表紙を眺めていた。本を手に取りうっとりしていると、ときに恩師井田清人先生(故人)が現れて、本の探し方を教えてくださいたり、本の在り処へ連れて行ってくださったりした。あのときの光景は今でも鮮やかに蘇ってくる。

書庫に潜っては図書を借り出し、必要な箇所を抜き出したり、コピーしたりした。今では当たり前のことだが、当時京都大学周辺には1枚10円でコピーしてくれる店が何軒もあって(巷の文房具屋さんは1枚30円)、そこで1冊まるごとコピーすることもあった(今白状するが違法行為)。そこでは何人もが列を作って1冊まるごとコピーしていて、近くにはそれを安く製本してくれる店もあった。その店では、カバーの色も紙も選ばせてくれたので、とても高くて手の出ない本をコピー製本しては得意げになっていた。

順序は逆になったが、大学3年生のときに初め

て渡仏した。そのときもずいぶん本屋をまわった。わたしの本好きはそのころすでに始まっていた。天井までとこ狭しとぎっしり並べられた万巻の本の山に身



を埋めて過ごす自分自身を夢想すらしていた。このころは、大学の図書館以外にも日仏学館の図書館や近くの市立図書館にも出入りして、資料を調べたり、本を借りたりしていた。

職業がら、本との付き合いは長くて深いが、わたしは、自分の手元に置くべき本と一過性で図書館で読めばいい本とを選び分けた方がいいと思っている。繰り返し読んで、自分の思索に影響を及ぼすであろう本は手元に置くべきだと思う。過去に読んだ本の背表紙を眺めると、ふと昔の記憶が蘇ったり、思考が広がったりすることがある。今ではわたしの書齋も本が増えて、とても背表紙の眺められる状態ではないが、ときおり学生時代に読んだ本を手にとってみると、懐かしい過去が彷彿としてくることがある。また少ない小遣い片手に本屋巡りをするのもよし。予算内で求めるべき本に優先順位をつける鑑識眼が養えると思う。今ではあまり図書館の書庫に潜ることはなくなってしまったが、懐かしい背表紙との再会は、わたしをあの「古きよき時代」にタイムスリップさせてくれるかもしれない。

わたしが学生時代に出遭ったラブレーの一節は、今でもわたしを四半世紀も昔の学生時代へといざなってくれる。このころ以来、わたしは思うがままに自由奔放な生活をしてきたような気がする。わたしは学生時代から、好きな本を読み、勝手気ままな思索を繰り返してきた。好きなときに好きな本の読める自由が許される学生時代には、自室であれ、図書館であれ、大いに書物との出遭いを重ね、「古きよき時代(ベルエポック)」を懐かしめる出遭いを積極的に求めていってほしい。

なかがわ よしお(教授・日本語教育学)